

ヒヨドリ猟

文 木村安兵衛

Text by Yasube Kimura

猟

師の間では色々な口伝えの教えがあります。その多くは山の知恵であり、いざという時、役に立つものばかりであります。しかし、時として全く逆のことを言うときがあります。同じ町の隣り合っている猟友会の組であつても違いは出てきます。

「小物(雑魚や外道ともいう)は獲るな。大物が獲れなくなる」という組があれば「大物猟の前に小物が獲れるのは、縁起が良い証拠だ」という組もあります。確かに山に犬を放して寝屋という鹿や猪の寝込みを襲い、びっくりさせて撃つという追い込むスタイルの猟では慌てて走る猪の勢いにびっくりしたウサギや狸が、猪の前を走ることにはよくあります。そんな時にウサギを撃つてしまうと、後ろを走っている猪に猟師の場所を教えてしまうので、急に方向転換をして逃げられてしまうのです。そんなことを指しての「小物を獲ると大物が獲れなくなる」なのでしょう。「大物猟の前に小物を獲ると縁起が良い」、私はこの言葉が大好きであります。

鴨猟と大物猟の隙間時間にやるのがヒヨドリ猟であります。ヒヨドリとは、都会の公園などにも多くいる灰色が

かったハトとスズメの中間ぐらいの鳥です。ヒヨ、ヒヨと鳴いているのでヒヨドリと名づけられました。私にはビュ！ときにはビュ！にしか聞こえません。この鳥は雑食で何でも食べるので、近年はスズメに代わって都会で幅を利かせているので目にする方も多いのではないのでしょうか。山里では果実園、特に柑橘系を好むので、ミカン農家や柚子農家の方々からは害獣とみなされております。果実園を荒らしているヒヨドリは果物ばかりを食べているせいかわ物凄く美味しいのであります。特に大寒の頃のヒヨドリは絶品であります。

冬に入るとそれまではバラバラに暮らしていたように見えていたヒヨドリたちは、群れをなすように見られます。ヒヨドリは渡り鳥でもあるという人もいます。渡り鳥と留鳥(1年を通して定住している鳥)が混在するのはカルガモみたいですね。

梅檀の木が集まっている森の茂みに身を潜めます。じつと気配を消すこと20分から40分、ヒヨドリがやって来ます。最初の1羽がやって来ると2羽3羽と集まってきてパーティーが始まります。そんな時はビュ！ビュ！とやか

ましく鳴き叫ぶのであります。それは警戒心が薄れたサイン。そうつと銃を構え、ドン！ヒヨドリたちが逃げた隙に回収に行きます。なぜかヒヨドリは火薬の匂いが好きなようで、また身を隠すと20分程で集まってきます。2時間程がんばっていると3羽から5羽ぐらいを捕まえることができます。

丸焼きにするよりも少し手が掛かりますが、モモ、手羽、ムネを左右に分けてしまい、焼き鳥にした方が美味しいのです。おやつや、つまみに最適です。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザー・ジャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。

